



臨床教育人間学

2002年 年報第4号

京都大学大学院教育学研究科 臨床教育学講座

臨床教育人間学 第4号 2002年

京都大学大学院教育学研究科臨床教育学講座

目次

小原國芳「全人教育論」のレトリック	皇 紀 夫	5
問題としての日本の教育人間学 — 京都学派の人間学を中心としたスケッチ (1) —	矢 野 智 司	21
存在し生きることそのものが悲哀であるということ — 西田哲学における自己論の考察 —	榎 本 修 作	31
覚醒的な教師としてのキルケゴール — 著作活動を通しての伝達、フモリストがひらくトポス	山 内 清 郎	53
可能性の自覚の論理的構造 — 最初の教育としての名付け —	岩 井 哲 雄	71
暁荘試験師範学校における陶行知の生活教育理論の展開についての 考察	陳 淑 敏	83
ベルクソンにおける創造性の理論	藤 井 奈 津 子	101
臨床としての風景構成法	皆 藤 章	119
臨床教育学講座2001年度授業科目一覧		131
編集後記		135
『臨床教育人間学』執筆要項		136

編集後記

紀要4号は、どのような船出になるのだろうか。編集を終え、ほっとしながらもやはり送り出す者の思いは複雑である。

本紀要は、何よりも野性的であることが特徴である（と、私は思っている）。この意味で、既成の学問体系のなかにフォーマライズされた論文は似合わない。読者には、論文の問題点を指摘する以上に、論文のなかに発想の独自性、着想の豊かさを見出して欲しいと願っている。このように述べて、すぐさま、それに見合うだけの論文が集まっているだろうかとの不安が湧く。それはもう、読者の判断に委ねるしかないだろう。もちろん、論文は「執筆要項」にあるようにきびしい査読を経ている。

近年、高等教育を巡る現状はそうとうにめまぐるしい。教育体制の見直しや学問領域の再編が推進されてきている。このような状況は、教官にも院生にも少なからざる影響を与えている。こうしたプロセスが「創造」へと繋がる営みであることを願いつつ、本講座に関わる者全員が微力ながら力を注いでいきたいと思っている。本紀要もそうした営みのひとつである。創刊以来4年を経て安定期に入った観があるが、けっして慢心することなく、つねに初心を忘れずに進んでいきたい。読者諸氏のご叱咤ご協力をお願いする次第である。

本号では、博士課程の藤井奈津子さんと修士課程の中桐万里子さんに編集の協力をしていただいた。末筆ながら、この場を借りて感謝申し上げます。

2002年 春
皆藤 章

臨床教育人間学 第4号

2002年3月31日

発行

京都大学大学院教育学研究科臨床教育学講座

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

Tel 075-753-3036 Fax 075-753-3036

Homepage <http://kyoumu.educ.kyoto-u.ac.jp/clipeda/>

E-mail clipeda@www.educ.kyoto-u.ac.jp

製作 (株) 北斗プリント社

〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38 の 2

Tel 075-791-6125

